

放

浪

家

族

放浪家族

船山 馨

河出書房新社



著者略歴

1914年（大正3）札幌に生れる。明治大学、早稲田大学中退。
著書に「半獣神」「石狩平野」「続石狩平野」「お登勢」等多数。

放浪家族 © 1970

1970年11月10日 初版印刷

1970年11月5日 初版発行

著者 船山 馨

装幀者 佐藤 忠良

発行者 中島 隆之

印刷者 堀内文治郎

定価 580円

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3-6

電話 東京 (03) 292-3711(大代表)

振替 東京 10802

0093-037026-0961

印刷・堀内印刷 製本・中西製本

放浪家族

ハード・ボイルド

「もしもし、堀田です」

どうぞ、という交換手の声の切れるのを待って、彼は自分の名を言った。

かならず相手に先んじて名乗るという電話の作法も、このごろでは影が薄くなつてきているが、堀田一郎は律義にその習慣を崩さない。ただ声が野太いので、いかにもぶっきらぼうに聞こえる。

「ああ、お父さん？ わたし……」

受話器のなかに、湿りをおびた若い女の声が返ってきた。

「珠子か。どこからかけている。京都か」

「いま東京へ着いたところです。ねえ、お父さん、すぐお会いしたいんです」

「仕事中だ。家へ行っていなさい」

「それが、みんな出かけているらしくて、いくら信号がいっても、誰も出ないんですもの。今日はもう、会社いいんでし

よう」

「克彦君とはちがう。どこかで、すこし暇つぶしをしてから、家へ行きなさい」

「暇をつぶすって、どこで……。わたし、いまひとりになっているの辛いんです。誰かそばについていてくれないと、淋しくって……」

「子供じゃあるまいし、甘ったれたことを言うんじゃない。忙しいんだ。切るよ」

珠子がさがりつくように、なにか言いかけるのを構いつけずに、一郎は受話器を置いて立ちあがった。

長女の珠子が結婚して、京都へ行ってから、もう二年ちかくなる。夫の井汲克彦はある私立大学の史学科の講師をしている。

あいつも、すっかり学校の先生の女房が板についてきたな。土曜日は誰も彼も半ドンだと思ひ込んでいる——。

株式課の部屋を出て、廊下をエレベーターのほうへ歩いてゆきながら、一郎はそう思って胸の片隅で微笑した。

それにしても、彼女の様子がちょっと気にならないではなかった。

結婚してから二年ほどのあいだに、珠子が東京へ来たのは二度きりしかない。いちどは里帰りで克彦と一緒であったし、二度目も学会に出席する克彦について来たので、ひとり

というのは今度がはじめてである。そのくせ、ひとりであるのが辛いなどと言っている。

一郎はむかしから、公私の別をはっきりさせないと氣のすまない性質だから、家族の誰にも、やたらに私用で会社へ訪ねてきたり、電話をかけてよこしたりするのは禁じてある。そのことは、珠子もちろん承知しているはずであった。

亭主と喧嘩でもしたのである。しようなない奴だ――。

四階の総務部長室の前で、彼は立ちどまった。

総務部長の河瀬満男は、半年ほど前に名古屋の支社から榮転してきたばかりであった。まだ四十前だというのに、総務部長とともに取締役を兼ねている。社長の姻戚だということ、社内では近い将来の専務だと噂されていた。

一郎も部課長会議の席などで、顔だけは知っている。しかしはるか末席の彼からは、河瀬は遠い存在であった。話しかけられたこともないし、話しかけたこともない。名指しで彼に呼ばれたりしたのは、これがはじめてであった。

彼は扉をノックして、なかへ入ると、

「お呼びですか」

と、持ち前の不愛想な声で言って、こころもち頭を下げた。

河瀬総務部長は正面の広いデスクの向こうで、ゆったりした革張りの椅子に背をもたれたまま、束の間、めずらしい動

物でも観察するような眼差しで、彼を見つめた。それから、ゆっくり立ちあがって、傍らの応接用のソファに席を移した。

「まあ、掛けたまえ」

細身の体を包んだ洒落た仕立の上衣の内ポケットから鼈甲製のシガレット・ケースをとりだし、ライターを摺って、ひと息煙草を喫い込んでからそう言って、河瀬は眼の前のソファに軽く顎をしゃくった。女のように柔和な、細い声であった。

「じつはね、ちょっと氣になる噂を耳にしたものだから、君の意見を聴こうと思つてね」

失礼しますと断わって、一郎が腰をかけると、河瀬は膝に落ちた煙草の灰を、神経質に長い指で弾きながら言った。

「どういうことでしょうか」

「うちの株が最近、妙な動きかたをしているというんだがね。なにか君の氣づいたことはないかね」

「妙な動きと申しますと？」

「誰か特定の間人が、特定の意図で、株を集めにかかつているのではないか、ということだよ」

「そういうことは、ないと思います。すくなくとも、今までのところは、疑わしい点はありません」

一郎はすこし考えてから、きっぱりとした口調で答えた。

「それならよろしい。この種の噂は意識的に流される場合もありがちだし、裏づけのある話でもないから、僕も本気で氣に病んでゐるわけじゃない。どうということはないのだが、充分に注意だけはしててくれたまえ」

「わかりました」

と、一郎はソファから腰を浮かしかけたが、河瀬は手をあげて、それを抑えた。

「まあ、いいじゃないか。すこし話してゆかんか。ところで、君はゴルフはどうだ」

「できません」

「できんのかね、やらんのかね」

「やらないから、できないのです」

「威張ることはないだろう。いまだきゴルフもやらんでは、仕事にも差しつかえんかね。どうだ、これから川奈へ行くんだが、一緒に来たまえ。僕がコーチしてあげよう」

「せっかくですが、興味がありません。それにゴルフを知らないために、仕事に差しつかえたことありません」

「はつきり言うね」

河瀬はいくらか白けた表情になった。

「あんな愉しいものが、どうして嫌いなのかな。いまだき新入社員だって、気の利いたのはみんなやるじゃないか」

「やったことがないので、愉しいかどうか、好きか嫌いか、

私にはわかりません。ただ、こう猫も杓子もゴルフ全盛になると、やる気がしないのです」

「僕もその猫か杓子のうちだってことになるな。評判通りの天邪鬼（あまのこじやく）だな、君は……。君にはなにか、余技とか愉しみとかいうものはないのかね」

「むかしは剣道をやっていました」

「剣道って、あの竹の棒で擲りあう、あれか……」

河瀬は肩をひそめた。野蠻な男だと言わんばかりの薄喰いが、瞳孔の小さい、一重の細い眼のなかをよぎった。

「はあ」

と、一郎は無頓着に頷いた。

「しかし、それも学生時代のことで、いまでは道具をつけただけで、息切れがするでしょうな。まあ愉しみと言えば、おでん屋で一杯やるくらいのことです」

「堀田君。君いくつだね」

「この春で五十二になりました」

「その年で、安酒を飲むことしか能がないのかね」

「酒を飲むのは愉しみで、能のあるなしとは無関係です」

「それだ。酒と直情径行（ちよくていこう）のほかは、と訂正しておこう。君は自分の渾名（なづな）を知っとるかね」

「知りません」

「ハード・ボイルドと言うんだそうぞ」

「わかりませんね。私と推理小説と、どう関係があるんでしょう」

「堅茹^{カヌ}でということさ。君が融通の利かないコチコチという意味だ。堅茹^{カヌ}での卵みたいに、味もそっけもなく、喰えたらんじやないという意味も含めてあるのだろうな」

「なるほど。巧いですな」

一郎は笑いだした。

「君が感心してるんじや世話なしだ」

河瀬はあきれたというふうには膝を叩いて、ソファから腰をあげた。彼の立ちあがる気配を察して、その前に一郎は椅子を離れていた。御機嫌とりはしないが、礼儀はつくすというやりかたである。

「とにかく君、いまだき直情径行とか、頑固なんてのは、三文の値打ちもないんだからね。生きてゆく邪魔になるばかりだよ。君の歳じゃ、もう遅すぎるかもしれないが、まあよく考えるんだね」

「はあ。できるだけ御忠告を無にしないように努めます」

一郎はそう言つて部屋を出た。

彼も自分の課の若い連中がかねがね、甘い会社の塩^{シホ}ツばい男、などと、自分のことを酒の肴にしているのは知っていた。

甘い会社というのは精糖会社だからで、これも秀逸だとは思っていたが、ハード・ボイルドはいいと、彼は廊下へ出て

も顔の笑いを消しきれなかった。

河瀬のあげすけな言いかたも、愉快ではなかったが、かくべつ気にもならなかった。だいいち、一郎は周りで言うほど自分を頑固だとも、直情径行型だとも思っていないかった。ごく平凡な、平均的日本人のつもりであった。

ただ、三十年ちかい歳月が積つて、サラリーマン生活の総決算が、あと数年に迫つてきてみると、その成果が平均的サラリーマンの域に達しているという自信は、彼にもなかった。

一郎は三崎精糖以外の会社を知らない。大学を出てすぐ入社し、途中で三年ほど戦争に行つたブランクはあるが、一貫してこの会社で働いてきている。

三崎精糖は現会長の三崎重治郎翁が一代で築きあげた会社であつた。

いまでこそ三崎精糖も、五指に入る業界の大手筋にのしあがつているが、一郎が入社したころは、まだ再製糖の小会社にすぎなかった。資本も言うに足りないし、人間もすくない。いきおい社長も工員もなかった。すこしでも業績をのばそうとして、みんな夢中で働いた。もちろん、一郎も例外ではなかった。

そのころの同僚で、いまでも会社に残っている少数の仲間、は、いずれも部長、支社長級である。ひとりとは重役室に納ま

っている。一郎は六年ほど前に、ようやく株式課長になった。

株式課というところは、会社としては第一線の部署ではない。株券の意義書換の時期にすこし忙しい思いをするにはするが、それもまったく事務的な忙しさであって、会社の業績に直接参加するような、生きた繁忙とは遠い。いわば閑職であつた。

—そうして、そのまま彼はそこに据え置かれてゐる。いまでは、ほとんどの上司が彼の後輩であつた。停年まであと三年足らず。どうやら現在の位置が彼の終着駅になりそうであつた。

彼のこの現実が周囲の眼からは、河瀬の言うように「直情径行が生きてゆく邪魔」になった結果と見えるのであろう。すると、やはり俺は人並よりいくらか頑固なのか。ハー・ポイルドなんて渾名がつくらいだからな——。

と、一郎は心のなかで呟いた。

しかし、株式課の自分の席へ戻ったときには、そんなことは脳裡から消えてしまつてゐた。

彼は受話器をとつて、兼万証券の第二課長を呼びだした。兼万証券は大手の証券会社で、砂糖などの食品株は第二課が担当している。課長の緒方東作は一郎の大学時代の後輩で、おなじ剣道部の選手をしてゐたところからつきあひがつづ

いている。気のおけない俺お前の古馴染であつた。
「堀田だ。ちょっと話したいことがある。これからそっちへ行つていいか」

「あいにくだが、これから結婚式に出なくてはならんのだ。夕方には体が空くから、れいのところで落ち会おう」

いつものせわしげな調子であつた。

れいのところと緒方が言つたのは、新宿の三越裏にある「田沢」という東北料理の店のことである。

むかしからの店で、一郎も緒方も学生のころからの馴染だから、れいのところというだけで二人には通じあう。もう六十をすぎた女主人が秋田の角館の出で、揃いの木綿紬の元禄袖で働いてゐる女の子たちも、みんな秋田の娘である。店の名は田沢湖にちなんであつた。

一郎は五時をすこし回つてから会社を出た。

飲み屋の時間には早いが、用もないのにいつまでも席に坐つてゐては、課員たちが可哀想であつた。

五月の末だというのに、この二、三日真夏のような蒸し暑さがつづいてゐたが、さすがに表へ出ると、まだ陽射しは強いものの、舗道を渡るそよ風が肌に心地よかつた。日本橋までゆっくり歩いて、地下鉄で新宿へ出た。

田沢はまだ暖簾が出てゐなかつたが、自分の家のような気易さで、彼は構わず店へ入つてゐた。

「おや、また今日はお早いこと」

手拭をかぶった割烹着姿で、女の子たちと下ごしらえをしていた女主人の友代が顔をあげた。

「緒方とここで会うんでね」

雪裏を吊した壁際の、隅のとまり木に腰をおろしながら、一郎は言った。長年の習慣で、この店ではそこが彼の席のようになっている。

「爛の用意はまだなんだろう。さきに冷やで一杯もらおうか」

「はいきた。堀田さんの好きな鮭ずしが、ちょうど漬かりごろだから、食べてみてけれせ」

年に似合わない、打てば響くといった調子で、友代は小柄な軀をきびきびと動かしながら、菰樽から一合枡に移した酒と、鮭の麴漬けの小皿を運んできた。

「ありがたいね」

一郎は煙草に火をつけて、上衣を脱いだ。

「おばさん、どうだい。俺は頑固かね」

枡の隅から冷い酒をひと口咽喉へ流し込んで、笑いながら彼は訊いた。

「ンだすな……。まんず相当なもんでねえすか」

「ふうん……。相当なもんか」

「まんず、そだすべ。わたすほどではなかんべどもな」

「おばさんと一緒にされちゃかなわない。いまでも嫌な客には、錢こ要らねすけ、帰ってけれせ、だからな」

「このごろは髪結いの亭主みたいな、頼りない男が流行りだそうだすども、人間、自分がこうと思ったことには、頑固なくらいでねば、だめだて。ことに男はね」

友代は眼を細めて笑った。

そこへ緒方が入ってきた。

「おばさん、お土産だ」

彼は提げていた婚礼の土産物の包みを友代に突き出して、モーニングの裾を割って、とまり木に一郎とならんた。

「どうも、この恰好で街を歩くのは、サマにならん。ちんどん屋のお披露目ってとこだな」

「仲人か」

「いや俺の課にいた女の子なんもんでね。三年以内にいい相手を見つけて結婚する、それ以上は勤めないって、入社したころから友だちに宣言していたそうだがね。二年四カ月で目標額を消化しちまったわけだ。気が利いてやさしくて、いまだき稀らしいいい子だったんだがな」

緒方はそう言つて、運ばれてきたビールを咽喉へ流し込んだ。彼はむかしからビールしか飲まない。

「それにしても、あんななよなよした男のどこがいいんだろうな。花嫁さんはもりもり食って飲んで、きゃツきやはしゃ

いで、ちつとも物おじしないのに、花婿はときどき、おちよほ口をしてしとやかにニンマリするだけで、借りて来た猫みたいに、かたくなって坐ったきりさ。それを、おふくろが心配でたまらんといったふうで、ちよろちよろ寄って行つては、ネクタイを直してやつたりしていやがる。まるで幼稚園の入園式だね。過保護もいいとこだよ」

「だども、この先息子さん夫婦と一緒に暮らすわけではないでしょう」

友代が煙をはじめながら口をはさんだ。

「一緒に暮らすさ。母ひとり子ひとりの家だからね」

「へえ。ばば抜きでねえすか」

「古い、古い。家つきカーつきは常識だが、ばばア抜きってのは、もうはやらないんだぜ」

「へえ、そうですね」

「そうさ。このごろは女中や家政婦は払底している。もしあったとしても、給料が相当だからね。その点、亭主のおふくろならタダだ。飯の仕度から掃除、洗濯、留守番、子供が生まれりゃ子守まで、一切合財なんでもやらせてタダですむのは、おふくろのほかにはないだろう」

「だば、母親はタダの女中兼家政婦ですか」

「そう。利用価値の再認識だな」

緒方は二本目のビールに手を出しながら、一郎を振り返っ

た。

「君ンとこの珠ちゃんだって、向うのおふくろさんと、うまくやつてるんだろう」

「うん。しかし意味がちがうな。そんないやな女に仕立てた覚えはない」

「それはそうさ。君の娘だから……。ところで、話というのはなんだ」

「たいしたことではないんだが……」

一郎はそろそろ客の立て混みはじめた店のなかを、ちらりと見やって声を落した。

「最近うちの株で、纏まった買い筋はないかね」

「どういう意味だ。買い占めの心配でもあるのか」

「わからん。おそらく、そんなことはないだろうが、うちの総務部長がどこかで噂を聴いたらしいんだ」

「なにかの間違いだろう」

緒方は一郎の顔を覗き込んだ眼に笑いを溜めた。

「多少買いが集まっているのは事実だが、少なくとも眼立つほどの大口はないな。分散買いでカムフラージュしているとすれば別だが、こいつは疑えばきりがないからな」

「それを調べてみてほしい」

「おいおい。そうあっさり言うがね、そいつは容易なことじゃないぜ」

「正確な実体は掴めないにしても、もし事実があるのなら、どこかで匂いくらいはするはずだ。ひとつ骨を折ってみてくれ」

「堀田先輩の命令とあれば、当ってはみるがね。ひでえことになったな。今晚の勘定はそっち持ちだぞ」

「引き受けてくれるか。ありがたい。もちろん調査費は出す」

「よしてくれ、水臭え」

それから二人はたわいのない話を肴に、腰を据えて飲み出したが、二時間ほどすると、緒方はモーニングの上衣を肩にかついで立ちあがった。

「さあ、河岸^{かし}を変えよう。キャロットだ」

いつもの梯子癖であった。

「よかろう」

一郎はひとつ場所で落ちついて飲むほうが性に合っているのだが、こういう場合は後へは退かない。一緒に飲みだしたら、特別な理由のないかぎり、最後までつきあうのが彼の主義であった。

二人は車を拾って、銀座へ舞い戻った。

西銀座も新橋に近い、ある航空会社のビルの地階にあるそのバーでも、二人は古い客であった。

店も狭いし、ホステスも三、四人しかないひっそりした

店だが、英国風のくすんだ落ちつきを持ったつくりで、調度もそれにふさわしく、渋いがつしりしたものを選んである。

胸間声で流行歌をわめいたりする客は、あまり寄りつかない。だから、いつも静かである。それが、マダム^{ママ}の氏家志保子の雰囲気でもあった。

二人が鉄の鋏を打った厚い樫の扉を押して、なかへ入ってゆくと、奥の客席から志保子が立ってきた。

「いらっしやいまし」

ほころんだ唇のあいだから、まぶしいような白い歯が覗く。ほんとうは小柄なのだが、ほっそりした軀^{からだ}つきで着物の着こなしがうまいので、かなりの身長に見える。

「やあ」

と、一郎は自分でもわかるほど無愛想な声になって、彼女から眼をそらしたまま、スタンドのとまり木に腰をおろした。

人妻役ではならぶ者がないと言われている、ある映画女優に似ているというこのマダムの前に出ると、いつも一郎は妙に落ちつかなくなる。心のどこかに、遠い潮騒に似たざわめきが波立つのである。五十をすぎた男が、世間知らずの若者のようにぎこちなくなる。それを覚られまいとして、よけい無愛想になってしまうことも、彼は自分でわかっていた。

むかしは欧州航路の客船に乗っていたという、身綺麗な白

髪の老バーテンが、二人の前に水割とビールを置くと、志保子もスタンドのなかへ入ってきた。

「堀田さん、あちらに……」

と、彼女は今まで自分のいた奥のボックスに眼をやつて、

「お母様がお見えになつていらつしやいますのよ」と言つた。

一郎はとつさに意味が呑み込めなくて、

「お母さんて、誰の……」

と、怪訝な表情のまま振り返つた。すると、黒い革張りのソファの横から、思いがけなく息子徹の少し照れた笑い顔が、こちらを覗いているのが見えた。

「徹じゃないか……」

彼はとまり木から腰を浮かせた。

徹はこの春大学の四年になった。二十二にもなつてゐるのだから、酒場への出入りも禁じてあるわけではない。だが、人にはそれぞれの節度というものがある。自分で一円の稼ぎもない学生の身分には、それにふさわしい飲み場所があるはずである。銀座の名の通つた店などへ出入りするのには分に過ぎるし、無神経な振舞いだと、彼はきびしい眼の色になつた。

「どうしたんだ。ここはまだお前などの……」

来るところではない、とボックスへ歩いてゆきながら言ひかけて、一郎は絶句した。息子とならんで、まるまっつい小柄な母のすずの姿が、そこにあつたからである。

「驚いたな、これは……。いったい、どうしたんです」

彼は棒立ちになつたまま、眼をみはつた。

「どうもいませんよ。お前がよく寄せていただくお店を、ちよつと見たかつたものですからね」

すずは七十四という歳にしては艶のいいまるい顔に、いっぱい笑みを拡げて、そう言いながら何度も頷いていた。しゃべりながら頷くのが、すずの癖である。

緒方と志保子もやつて来て、座は賑やかになつた。

「いつも一郎がお世話様になりますって、さつき、お母様にお礼をおつしやられて、私こまつてしまいましたわ」

と、志保子が言つた。

かすかな狼狽が、一郎の胸を走つた。すずが息子の私行を探つて歩くような、陰湿なことのできる性分でないことはわかりすぎるほどわかつていた。だからその狼狽は、志保子と向きあうと平静でいられなくなる彼自身の心の翳のようであつた。

「お母さんの社会見学ですな」

緒方が愉快そうに口をはさんだ。

「そうなんですよ。おばあちゃんが、どうしてもいっぺんダ

ループ・サウンズってのを見せろって、きかないもんで、いまその帰りなんです」

徹が閉口したように、笑いながら頭を振った。

「お母さんの物好きも相当なもんだ。あんなもの、どこがいんですか」

緒方はあきれ顔になった。学生時代から母親がわりに親しんできただけに、彼はすずにも遠慮がない。

「いいえね。よく雑誌やなかで、あれを聴いて女の子が気絶するって言うでしょう。だけど、いくら気の小さい子でも、歌を聴いただけで気絶するなんて、私にはどうしても納得がいかない。テレビでは本当の気分はわからないから、一度本物を見たかったんですよ」

「それでどうでした、御感想は」

「面白うござんしたよ。本当に気絶するんですからね。それも一人や二人じゃない、バツタ、バツタと卒倒するんですよ。どういうわけなんでしょうね。狐につままれたようですよ」

「お母さんは卒倒しませんでしたか」

緒方が笑いながら訊いた。

「卒倒しようにも、だいいち歌なんか聴こえやしないですからねえ。女の子が総立ちになって金切声をあげるやら、足踏みをするやら、蜂の巣を突いたような騒ぎなんだから……」

「後ろの子なんか、泣き声をあげながら、ハンドバッグでおばあちゃんの頭でも肩でも、滅多やたらに擲るんだ。凄いのなんの」

徹が手真似入りで説明するのに、すずもうなずいて、「そう。あれで私も危なく気が遠くなりそうでしたね」と真顔で言ったので、みんなは笑いだした。

「お母さんは若いな。知識欲旺盛で行動的だ。君や俺のほうが、ずっと老け込んでるぜ。少し見習わんといかんな」

「若いんじゃないくて、子供に還ったんだらう」

一郎は苦笑した。

「子供の好奇心だって言うんだらう。はいはい、私はなんでも見てやろうばあさんですからね」

すずは眼を糸のようにして笑いながら、何度もうなずいてみせた。

「佳子はどうしたんです。家が留守になっているらしかったが……」

一郎は昼間の珠子の電話を思い出して訊いてみた。

「めぐみの応援に代々木の体育館へ行きましたよ。高校の体操の大会があるんですよ。お前知らなかったの」

「おばあちゃんと僕は、ほんとうは留守番を仰せつかったんだだけだね。共謀して抜け出しちゃった。だって、おばあちゃんひとりですすわけにはいかないからね」

と、徹は指の先で額を叩く真似をした。

「しやうがないな。珠子が来ているんですよ」

「おや、そうかい。それじゃ、こうしちゃいられない。徹、帰りましょ」

すずは急にそわそわして立ちあがった。

「そいつは知らなかったな。君も一緒に帰ってやれよ。珠子やんとは久しぶりだろう」

緒方が一郎に言った。

「そうだな……。じゃ、すまんが今夜は先に失敬する。さっきのことは頼んだぞ」

「まかせておけッて」

一郎も腰をあげた。

すずは志保子に、額が膝につくような深いお辞儀をしていた。今後とも一郎のことは、よろしくお頼み申します、などと言っているのが聴こえて、彼は照れて、

「さ、お母さん」

と、すずの袖を引いて、急いで表へ出た。

志保子が扉の外まで送って出た。

「克彦さんも一緒だろうね」

ようやく拾った車が走り出すと、すずが訊いた。

「いや、ひとりのようです」

「おやおや。旦那様を放ったらかしで、遊びに来たのかい。」

あの子も奥さんずれがして、貫禄が出てきたね」

「克彦君もたまには、お母さんと水いらすずでいいでしょう」

あの電話の様子では、そんな暢気なことでもなさそうだと思うながら、一郎は煙草に火をつけた。

「そんな考え方はいけないよ。結婚したら、お嫁さんも水いらすずですよ。たった三人の家族で、誰と誰が水いらすずで、誰が他人なんて区別する気持ちがあったのでは、うまく行くわけがありませんからね」

「その通りですが、現実にはなかなか、理想通りにはゆきませんからね。ことに克彦君の場合は母ひとり子ひとりだから、そこは珠子も考えて差しあげなくてはならぬでしょう」

「お前だって独りッ子だけれど、お前と私が水いらすずで、珠子は他人だなんて、私も佳子も考えたことはありませんよ」

「徹はどうだ」

一郎は徹に煙草の箱を差し出しながら言った。

「親子と夫婦の問題は、人情論や思いやりではどうにもならないんじゃないかな。まず結婚したら夫婦が主体で、親は一種の他人だと、とくに親の側ではっきり割り切った意識を持つことが先決だと思うな。そのうえで思いやりなり、人情論でないかね。親と子、とくにおふくろと息子の結びつきってのは、一般的に執拗でじめじめしているからなア」

「お前は女房をもらつたらどうする。別居するか」

「そうなるだろうな。親の家に同居しているほうが、経済的には助かりますが、だいいち、戸籍が別になってしまいうんだから、女房連れて居候するようなもので、締まらないでしょう」

「戸籍が別になるのは、お嫁さんのほうですよ」
「さすが口をはさんだ。」

「いや、結婚すれば息子も親の籍から除かれるんです。戦後は憲法で、夫婦が家の単位なんですよ」

一郎が訂正した。

「すると、徹も結婚すると、うちの人間じゃなくなるのかい」

「戸籍上はね」

「へえ。これはショックだ」

「さすがそう言ったので、一郎も徹も笑いだした。」

新宿からある私鉄で四つ目に、新井薬師という駅がある。

その名の通り、駅のすぐ近くに古くから知られた薬師堂があつて、その縁日にはいまでも近隣からの人出でにぎわうが、むかしは下町のほうからまで参詣人が集まつて、東京の西北部では、俗に堀の内のお祖師さまと呼ばれる杉並の妙法寺とならば称されたこともある。

町はその薬師堂の門前から参道を中心に拡がっていった歴史をもつので、いまでもどこか鄙びた感じの、小さな商店が

一郎の亡父の達衛が農林省を停年で退官して、鰻の寝床のように表通りの両側だけにつづいている商店街の裏手に、二百坪ほどの土地を買つて、三十坪足らずの平屋を建てたころは、そのあたりはまだ武蔵野の面影の濃い、いちめんの原っぱであつた。

それが戦後急速に家がたてこんできて、いまでは空地らしいものと言へば、駅の反対側にある消防庁の野球グラウンドくらいのもので、郊外という感じはどこにもなくなつてしまつてゐる。

もつとも、埼玉、茨城、千葉といった近県一帯にまで東京のベッド・タウンがのび、この私鉄の沿線で言へば、所沢や川越、飯能の奥まで、びっしり団地で埋まつてしまつてゐる現状では、新宿からわずか四駅目の町が郊外であるはずはなかつた。

遠距離から通勤している若い社員には、そういういわば都心と言つてもいい場所に、自分の家をもつてゐる一郎などは、一種の特権階級と映るらしかつた。

それはそうに違いなと、一郎も認めないわけにはいかなかった。毎日の通勤に往復三時間も四時間も満員電車にすしづめにされる人びとから見れば、新宿まで二十分足らずの近距離に住んでゐられるのは、僥倖と言わなければならぬ。